

模擬産婦養成 プログラム

— 実習前の産婦ケア能力向上のために —



分娩進行中の産婦のケアをリアルな形で疑似体験することによって、産婦中心のケアやコミュニケーションへの学生自身の気づきが促されます。安心・安全な学内環境で助産師学生の学びの体験に模擬産婦として参加してみませんか？



平成28年度 - 30年度 科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金) 基盤研究(C)

「効果的な分娩介助演習のための模擬産婦のフィードバックに関する能力開発と評価」

研究代表者：鈴木 幸子（埼玉県立大学保健医療福祉学部）

〒343-8540 埼玉県越谷市三野宮 820 TEL:048-973-4171 MAIL:suzuki-sachiko@spu.ac.jp

執筆者

石井 邦子（研究分担者：千葉県立保健医療大学健康科学部）

青柳 優子（研究分担者：順天堂大学医療看護学部）

山本 英子（研究協力者：埼玉県立大学保健医療福祉学部）

森 美紀（研究協力者：埼玉県立大学保健医療福祉学部）

東原亜希子（研究協力者：埼玉県立大学保健医療福祉学部）

北川 良子（研究協力者：千葉県立保健医療大学健康科学部）

川城由紀子（研究協力者：千葉県立保健医療大学健康科学部）

植竹 貴子（研究協力者：順天堂大学医療看護学部）

科研費
KAKENHI

このパンフレットに掲載されている文章、画像等の無断転載はご遠慮ください。

目次

■ 模擬産婦養成プログラム作成の背景	P 1
■ 模擬産婦養成プログラムの概要	P 2
1. 目的	
2. 対象者	
3. スタッフ・場の設定	
4. プログラムのスケジュール	
5. 事前課題	
■ 模擬産婦養成プログラムの実際	P 3
1. シナリオでの役作り	
2. ファントム操作の練習	
3. フィードバック方法の演習	P 4
フィードバックとは	
フィードバックの基本と学生の学び	
フィードバックの進め方	P 5
フィードバックの練習	P 6
4. 模擬産婦体験	P 7
産婦演技	
フィードバック	
5. まとめ	P 8
模擬産婦体験の振り返りと共有	
分娩介助技術演習に向けて	
■ 体験談	P 9
模擬産婦を体験して（助産師）	
模擬産婦が参加する演習を体験して（学生）	
実習終了後の意見（学生）	

模擬産婦養成プログラム作成の背景

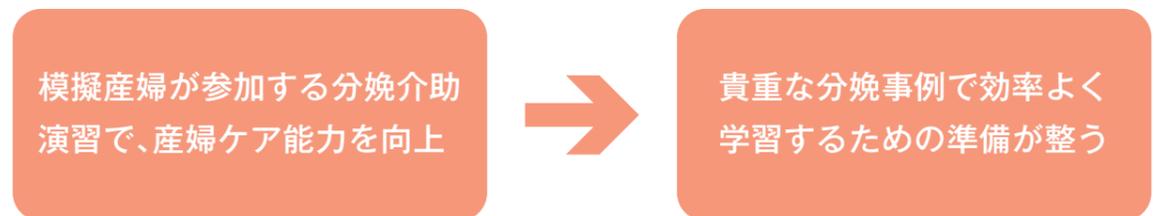
なぜ模擬産婦が参加する演習が必要なのか？

【実習が困難な社会的背景】

- ・分娩介助実習として適切なローリスク産婦の減少（少子化、産婦高齢化、分娩のハイリスク化）
- ・産婦や病院の実習協力が得にくい（産婦の人権擁護、病棟の助産師不足）
- ・実習期間が長く取れない（産科病棟での実習の過密、カリキュラムの過密）
- ・産婦の分娩期の変化を知らない（分娩が少なく、これまでの実習で見学したことがない）

【学生の実習前の産婦ケア実践能力が不十分】

分娩介助を含む一連の産婦ケアの中で、とくに「胎児の健康状態に関するアセスメントとケア」、「産婦とのコミュニケーションを含む産婦の状況に合わせたケア」の実践ができないことが明らかに示されました。



なぜ教員が演じる産婦役だけではダメなのか？

リアルに演じ、学生にフィードバックができる模擬産婦と胎児心拍が再生できる装置が必要です。

- ・教員と学生はすでに人間関係があり、緊張感がなく慣れが生じる
- ・教員は学生の手技に注目してしまい、産婦として自然な反応ができない
- ・産婦役は演じられても、胎児の健康状態の情報がない

模擬産婦養成プログラム

模擬産婦の養成は、プログラムの試行を経て【ファントムの娩出操作が難しく演技に集中できない】【フィードバックが難しい】等の課題を改善し作成した「模擬産婦養成プログラム」に沿って行います。

文献：

- ・鈴木 幸子, 渡部 尚子, 大井 けい子, 石井 邦子, 林 ひろみ, 山本 英子, 芝本 美紀, 北川 良子: 看護系大学学士課程助産学生に有用な産婦ケア（分娩介助含む）の教育方法の検討—実習前の到達度, 平成22年度文部科学研究補助金（基盤研究A）研究成果報告書, 研究代表者 新道 幸恵, 2011.
- ・鈴木 幸子, 石井 邦子, 大井 けい子, 山本 英子, 芝本 美紀, 林 ひろみ, 北川 良子: 分娩介助演習に参加する模擬産婦の養成プログラム試案, 保健医療福祉科学, 3, 52-56, 2014.
- ・鈴木 幸子, 石井 邦子, 助産学生のための産婦ケアの教育方法（新道 幸恵監修）, 第2章 実習開始前教育, 金芳堂, 26-49, 2016.
- ・森 美紀, 鈴木 幸子, 石井 邦子, 大井 けい子, 林 ひろみ, 山本 英子, 北川 良子: 模擬産婦養成プログラムおよび模擬産婦と胎児心拍陣痛図再生装置を用いた分娩介助演習の評価, 日本母性看護学会誌, 16(1), 85-92, 2016.

模擬産婦養成プログラムの概要

1. 目的

助産学生が、安全・安楽な出産を支える産婦ケア能力を修得するためには、実習前の学内演習において臨場感のある分娩シーンを再現することが効果的です。分娩進行や学生のケアに対してリアルに反応する産婦役がいれば、陣痛の強弱や胎児の健康状態に気を配り、産婦とコミュニケーションをとりながら、円滑な分娩進行を誘導・調節するという産婦ケアを学内で体験することができます。模擬産婦養成プログラムでは、臨場感のある分娩シーンを再現し、さらに、産婦の立場から学生にフィードバックする模擬産婦を養成します。

2. 対象者

学生のケアに反応しながらリアリティのある産婦を演じられる者に限定するため、20～40歳代の助産師・看護師経験のある女性を対象とします。

3. スタッフ・場の設定

《スタッフ》

- 講師、学生役(新人助産師など)、ファントム操作、CTG再生、動画撮影の補助など、4名以上が担当します。

《場の設定》

- 使用器具や物品配置など、最大限、臨地実習における産婦ケア状況を再現します。
- 分娩台にファントムを置き、CTGモニターを装着します。CTGデータと胎児心音を再生しながら行います。
- 未破水の事例の場合は胎胞(コンドームに水を注入)を準備します。

《動画撮影》

- 産婦演技とフィードバックを動画録画し、自分で視聴して振り返りを行います。

5. 事前課題

分娩の「シナリオ」をもとに事前にワークシートを記載して、役作りをしておきます。自分が演じる産婦の人物像を設定し、分娩時の各場面における心身の状態を想定します。

《産婦の背景と産科的情報》

- 年齢、分娩歴、家族社会的背景、妊娠経過、分娩開始後の身体状況、心理状況を設定する。
- 学生のレディネスに合わせ、学生が実習で出会う典型的な産婦の設定にする。

《分娩進行》

- 自分が演じる人物像に基づき、分娩進行に合わせて、どのような心理状態、言動をとるのかをあらかじめ計画する。(最長15分の演技時間)

4. プログラムのスケジュール

所要時間	内容
30分	模擬産婦養成の背景と概要(講義)と自己紹介
15分	模擬産婦が参加した分娩介助演習の動画視聴
10分	FBロールプレイの動画視聴
30分	シナリオで役作り(事前課題の発表と討議)
20分	FBの原則(講義)
50分	FBの練習(動画視聴後、発表と討議)
30分	ファントム操作の練習
1人45分	模擬産婦体験(演技・FB準備・FB)
15分	振り返りの共有・まとめ

模擬産婦養成プログラムの実際

1. シナリオでの役作り

ワークシート①②をもとに、整理した人物像/心理状態/身体状態と、分娩経過に沿った心理状態/言動の変化について発表します。

他の模擬産婦の役作りを聞きながら、さらに具体的な役作りになるよう書き込んでいきます。



ワークシート①

情報	人物像 / 心理状況 / 身体状況
<ul style="list-style-type: none"> O-P、32歳、妊娠40週2日、身長160cm、非妊時体重46kg、結婚3年目、待望の第1子、妊娠と同時に事務職を退職 妊婦健診14回受診、病院と市の母親教室を受講 「できれば自然に産みたい、呼吸法のリードをしてほしい、分娩台で母乳をあげたい」とのバースプランあり。夫は出張が多く立ち会い希望なし。 	

ワークシート②

陣痛	胎児・付属物	怒責・分娩進行	予測される学生の言動	心理状況 / 行動
発作40秒 間欠1分	FHB140bpm、 徐脈なし	弱めの怒責	肛門保護 怒責の誘導	
怒責中に自然破水、 娩出力が急激に増強	破水後70bpm まで低下、緩やかに回復	怒責感制御不可能	破水の観察 心音の観察 深呼吸を促す	

産婦になりきる！

- 専門用語ではなく産婦のような言葉づかいをする。
- 分娩第2期の切迫した状態を、表情や言葉にならない声や呼吸で表現する。
- 答えたくないとき、言うとおりに体が動かないと感じるときは、学生の質問にきちんと答えたり、学生の言動に合わせて体を動かさなくてもよい。

2. ファントム操作の練習

- 産婦を演じながら、胎児を娩出させます。
- 陣痛の発作・間欠に合わせて娩出させます。
- 会陰部を見ずに、児頭の娩出の加減を調節します。
- 排臨、発露、第3回旋、第4回旋の操作方法を練習します。
- 分娩のシナリオに基づき、10～15分で児を娩出します。
- シナリオによっては破水場面の練習をします。



3. フィードバック方法の演習

《フィードバックとは》

- ・ 学習者の栄養になる情報を戻すことであり、演習の後に、学習者が実施したケアの ①良かった点、②改善した方がよい点について学習者に効果的に伝えることである。
- ・ フィードバックを受けた学習者が、自分で気づかない「盲点」、自分の行動が与える影響、自分の長所について気づくことにより、自分がどう変わるべきか具体的に理解できる。

(鈴木富雄, 阿部恵子: よくわかる医療面接と模擬患者; 名古屋大学出版会, 2011改変)

《フィードバックの基本と学生の学び》

- ・ 模擬産婦として、分娩中に起きた「事実」とそれに対する「感情」をセットにして伝えます。
「事実」: 分娩進行に伴う現象・体感、学生の言葉かけ・しぐさ・態度・行動・声のトーン 等
「感情」: 「事実」に対する模擬産婦自身の心の動き・頭の中の思考 等
- ・ 「事実」に対する感情に沿って、ポジティブフィードバック (P-FB) あるいはネガティブフィードバック (N-FB) をします。
- ・ 産婦の反応から意味を理解し、学生自身がどうしたらよいかを考え、見出す学びに繋がります。

フィードバックの《べからず8原則》

<p>漠然としている: × 「よかった」「なんとなく楽しかった」 ⇒ 学生の実際の言動に対してどのように感じたかをもっと具体的に話す ○ 「顔をみて話してくれたのでよかった」「呼吸に合わせて指示してくれたので楽しかった」</p>
<p>場外 (他との比較): × 「先週の学生さんは上手だった」 ⇒ 演習の中で起きたことだけフィードバックする</p>
<p>人間の尊厳を欠く: × 「そんなに小さな手ではあぶなっかしいね」 ⇒ 変えようがない身体的特徴や人格が傷つくようなフィードバックはしない、行動変容が可能な内容とする</p>
<p>一般論・価値・善悪: × 「お産の時は誰でも親切にしてもらいたいもの」 ⇒ 演じる産婦が感じたこと、思った事に限定し、自分の考え・価値観と混同しない</p>
<p>欲張りの要求をする: × 「機械のグラフの意味が分からなかった」 ⇒ 学生の習熟度、性格に合わせてフィードバックする</p>
<p>自分の不出来を言う: × 「うまい産婦でなくてごめん」 ⇒ リアリティがなくなってしまうので言わない</p>
<p>ないものねだり: × 「もっと呼吸法をリードして欲しかった」 ⇒ 「こうしてほしい」要求を述べない、どうしたらよいかは演習後のディスカッションで考えてもらう。</p>
<p>ファシリテーターの視点: × 「共感できていてよかった」 ⇒ 評価ではない、具体的な言葉行動を示し、どう感じたかを伝える ○ 「突然破水してわけがわからなくなったとき、『びっくりしましたね、破水ですよ』と言ってくれて安心した」</p>

(鈴木富雄, 阿部恵子: よくわかる医療面接と模擬患者; 名古屋大学出版会, 2011 より一部改訂)

! 例外

学生が明確に自己評価をした上で模擬産婦に確認する場合は、以下の二つの方法を用いても良い。

- ① ないものねだり
様々な状況があることを前提として、「事実と感情」または「事実のみ」「感情のみ」で理由を述べた上で要求する。
- ② 「事実のみ」「感情のみ」を伝える

<例>

学生: 「緊張して声がどんどん小さくなってしまったので、もっと大きい方がよかったですか」

- ① : 「あの時は声が聞き取れず不安だったので、大きい声で話してほしかったです」
- ② : 「声が聞き取れなかったです」 (事実のみ)
「私は、あの時とても不安な気持ちになりました」 (感情のみ)

《フィードバックの進め方》

用紙を記入 (約15分) してから、学生とのやり取り (約15分) をします。

フィードバックの進行は学生が行います。

模擬産婦は、フィードバックに対する学生の反応の言語化を促します。

教員はフィードバックに対して学生の反応が不明な場合など、進行のサポート役として立ち会います。

(1) 児の娩出直後に、フィードバック用紙を記入する (約15分)。

- ・ シナリオに沿って、注目した「事実」と事実に伴う「感情P (ポジティブ)」、「感情N (ネガティブ)」を記入する。シナリオ全体を通して、注目した「事実」がある場合も同様に記入する。
(学生は自己評価用紙に、注目した「事実」「自己評価」「模擬産婦への確認事項」を記入する)

(2) 学生の自己評価と模擬産婦への確認事項を把握する。

- ・ 学生が、まず自己の注目した「事実」に対する自己評価を一つずつ述べる。
- ・ 学生の述べた内容から以下を把握する。
学生が注目している「事実」は何か。
事実に対する自己評価はどのようなもので、どの程度具体化しているか。
学生が求めているフィードバックは何か。

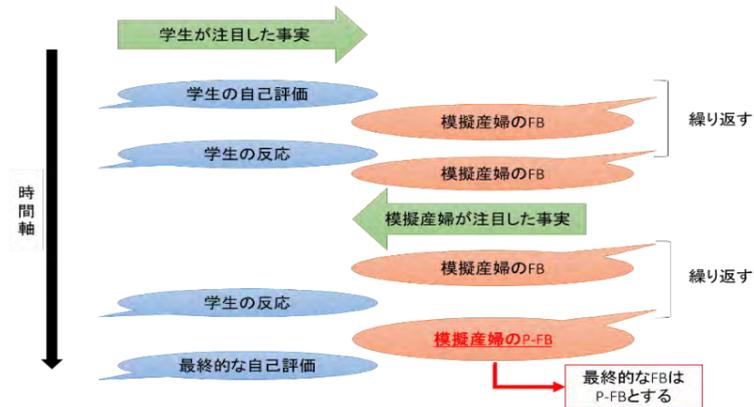
(3) 学生の注目した「事実」毎に一つひとつフィードバックを行う。

- ・ 「事実」+「感情」のセットで述べる。
- ・ 一つの「事実」に対して、「P-FB」か「N-FB」のどちらか、または両方を伝える。
- ・ 「べからず8原則」に則る。
- ・ 一つひとつのFBに対して、さらに学生の反応を引き出す。

(4) 学生が注目していない事実に関するフィードバックを一つずつ伝える。

- ・「事実」+「感情」のセットで述べる。
- ・特定の「事実」に対して、「P-FB」か「N-FB」のどちらか、または両方を伝える。
- ・「べからず8原則」に則る。
- ・一つひとつのFBに対する学生の反応を引き出す。
- ・最終的なFBは「P-FB」とする。(下図参照)

(5) 学生のフィードバックからの気づきと最終的な自己評価の表出を促す。



《フィードバックの練習》

～「事実」と「感情」を取り出すトレーニング～

- ・産婦ケア演習場面(動画)をみて「事実」とそれに対する「感情」をセットで記憶します。
- ・フィードバック用紙に書き込みます。

～事実と感情を伝える練習～

- ・フィードバック内容を参加者同士で発表し合います。
- ・基本について確認しましょう。
 - 産婦目線の「事実」と「感情」をセットで伝えているか。
 - 「P-NB」「N-FB」の両方を伝えているか。
 - 「べからず8原則」に則っているか。
- ・表現方法を工夫したり、バリエーションを増やしていきましょう。

フィードバック用紙(一部抜粋)

SP用フィードバック用紙		フィードバック(FB)前に記入			FB中に記入	
time	シナリオ	注目した事実	事実に伴う感情(P)	事実に伴う感情(N)	学生が注目した事実	学生の自己評価
0:00	1 陣痛が弱く、有効な怒責がかからない FHB140bpm					
4:00	2 自然破水、怒責制御困難 破水後FHB140→70bpm 回復緩慢					

4. 模擬産婦体験

《産婦演技》

あなたが設定した産婦の人物像を演じてみましょう。

～演技のコツ～

- ・専門用語ではなく産婦のような言葉づかいで
- ・切迫感やパニック状態を表情・声・呼吸で表すと?
- ・様々な言動を組み込んで
- ・CTGモニターや外陰部を注視しないように
- ・産婦の表情が学生に見えていますか?
- ・児頭の娩出操作が上手くできなくても焦らずに
- ・進行は陣痛係の合図に任せて産婦になり切りましょう。



例

お腹の張りがわからなくて戸惑う。
発作時に、思わず出る大声。
発作も間歇もずっととなる。
痛みや苦痛で質問に答えられない。
自分に集中して、目を閉じている。
とにかく黙っている。

例

児の様子を何度も質問する。
破水「何が起こったんですか?」
お水をすすめられても「飲みたくない」
身体をよじる。
過呼吸になる。
足がつる。

《フィードバック》

演技が終わっても、産婦の人物像になりきってフィードバックしましょう。

～フィードバックのコツ～

- ・「事実」と「感情」がセットになっていますか?
- ・N-FBばかり、またはP-FBばかりになっていませんか?
- ・産婦目線の表現で

例:

「苦しい時に穏やかな口調で『大丈夫ですよ』と言ってくれたので頑張ろうという気持ちになりました。
「毎回の陣痛でいきみをほめてくれて、これでいいんだと安心できました。」
「強い口調で『いきんだらダメ』と言われて、悲しい気持ちになりました。」
「『楽にいきみましょう』と言われたのが、どうすればいいのかわかりませんでした。」

- ・指導者の立場にならぬように、次のような発言は避けましょう

例：

「産婦がいきんでいる時に会陰部から目を離していた。」
 「穏やかな口調で話すのは産婦に安心感を与えるコミュニケーションスキルだからとてもよかった。」
 「いきみたい時に強い口調で『いきんだらダメ』と言うのは産婦に共感するケアになっていない。」
 「陣痛が来ているときに、長々と説明しても有効ではない」

- ・学生の反応を促す声かけを工夫してみましょう

例：

「私はこう感じましたが、学生さんはどのように感じましたか（考えていましたか）。」

- ・最終的なFBはポジティブな内容で

例：

「声のトーンが聞きやすく、その度に冷静になれました。」

- ・最後に学生の最終的な自己評価の表出を促しましょう

例：

「最後にフィードバックを受けて考えたことを教えてください。」



5. まとめ

模擬産婦体験の振り返りと共有

- ・自分が行った模擬産婦とフィードバックの実際を撮影した映像を見て振り返ります。
- ・他の模擬産婦や教員と本番の演習に向けた課題を共有しましょう。

分娩介助技術演習に向けて

- ・作成したシナリオの役作りを修正しましょう。
- ・演習の当日には実際のファントム操作方法の練習をして、本番に臨んでください。



体験談

模擬産婦を体験して（助産師）

〔ファントムの操作と演技の難しさ〕

- ・普段、接している産婦を想像しながら演じましたが、分娩経過（陣痛や胎児心音の変化）に応じて演技しながら、胎児を押し出すことが難しいです。
- ・演じること（顔の表情・声の出し方など）と胎児（人形）の押し出しを同時に行わなくてはいけないので、分娩経過のシナリオをしっかりと記憶して演習に臨みたいです。

〔演技に夢中になり、覚えられない〕

- ・演技に集中するあまり、学生の言葉が聞き取れないことや、やり取りを忘れそうになりフィードバックがまとまらないなど、困難もありました。演じつつ冷静さがが必要です。

〔フィードバックのポイント〕

- ・ネガティブフィードバックに偏りがちになります。
- ・『要望やこうして欲しかった』にならないよう、気をつけています。
- ・産婦の気持ちや感情を、言葉で豊かに表現できるようにしたいです。

〔演じたことの副効果〕

- ・模擬産婦を演じてみて、産婦の気持ちや苦しさをさらに理解できました。これからは、もっと産婦に寄り添える看護ケアができそうです。
- ・どのような実習場面で学生は対応を難しく感じているのかを知りました。今後の指導に生かして行きたいと思います。
- ・新人助産師への指導、学生実習時のフィードバックとして活用できると感じました。

模擬産婦が参加する演習を体験して（学生）

- ・産婦の呼吸をよく聞いて、いきみを誘導しなければならないと思いました。演習は臨場感があり、初対面の産婦との関係性を構築することの難しさを学びました。
- ・緊張していた自分の表情が産婦に伝わって産婦さんは緊張して不安もあるので、まずは自分が落ち着かなければと思いました。
- ・初対面の産婦から、自分がどのような印象を持たれたのか、自分の話し方の癖も気づかされました。
- ・安全・安楽な出産のために、知識・技術をつけながら産婦に寄り添うことを忘れず、表情や思いを感じ取りながら介助していきたい。

実習終了後の意見（学生）

- ・1 例目はほとんど余裕がなかったのですが、例数が進む中でどのように産婦に声をかけるか、演習を思い出しながら考え行うことができました。
- ・演習で模擬産婦さんが褒めてくれた部分は、少し自信になり実習に活かしました。
- ・リアルなCTGを使った演習をしたことで、実習中にも児心音に注意しなければという意識を持って介助に取り組みました。